

「入所施設の暮らしを支える課題と援助のあり方に関する研究」

(平成8年度厚生省心身障害研究)

研究協力者 五十嵐 康郎 1

はじめに

入所施設は利用者にとって暮らしの場であり、場面はとどまることなく連続している。

当園の例をあげれば、19歳から28歳までの自閉症の青年達を中心とした30名の利用者に対して、生活指導員9名、看護婦1名と3名のパート職員によって直接的な援助業務が行われている。勤務者は時間帯やその日によっても違うが、最大で7～8名、少ない時間帯は1～2名の場合もある。

職員の業務は直接の援助業務の外に、掃除、洗濯、簡単な修理や修繕、入浴準備、若干の事務的作業等々と多岐にわたっており、勤務形態は変則的な二直二交替制である。

学校、通所施設、大学や行政機関あるいは私的に開かれる教室のようなものと様々な発達障害児・者の療育の場が存在するが、入所施設においては生活指導や作業指導という角度で検討されることはあっても、本研究の趣旨に見られるような角度から検討されることはこれまであまりなかったのではないだろうか。

個別的療育と課題指導に関しては様々な角度からの検討を試みる必要があるが、初年度は事例を通して、障害児・者が入所施設で暮らす場合の基本的な課題を整理して、障害児・者の内的世界の理解に基づいた援助のあり方を検討する。

2 ステップ1「安心して暮らす」 施設に入所する発達障害児・者が、最初に直面する課題は

施設での暮らしを受容することだが、援助者にとっての課題は安心して暮らせる環境を保障することである。

当園の利用者の多くは入所前に通所の期間を設けたり、実習という形で短期入所を体験している。保護者の方には当園への入所について可能な限り、本人に説明して納得してもらおうようお願いしている。

<事例1> 昭和52年生 男性 自閉症 療育手帳B1

A君は養護学校の中等部を卒業後、当園に入所した。養護学校在学中にすでに実習にきて、母親から養護学校を卒業したら当園に入所することを聞かされていたので、本人は以前から入所する日を楽しみにしており、すでに顔見知りになっていた職員に迎えられて入所した。

A君は入所当時、何ごとにつけてもこわばった表情で職員に向かって、「ですか、×ですか」と脅迫的に連呼していた。何によってそうした行動がもたらされたかは推測するしかないが、当園で暮らしていくうちに自然に消滅していった。

A君の場合は養護学校在学中に実習にきて、本人なりに卒業したらめぶき園に入所しようと思っていたようである。初めのうちは「か、×か」と職員の評価を気にしていたが、できるだけ否定的な評価をしないようにして、業者からの委託で行っている進物用の箱折

の仕事で周囲から認められるようになって、やがて言わなくなったのである。

(後日談・・・その後A君は就労を目指して、一般企業で職場実習を行っている。)

<事例2>昭和61年生 男性 自閉症 療育手帳A1 母親が交通事故の後遺症で安静が必要なためにB君が緊急一時入所することになった。

母親の話では「新しい場面になかなかとけこむことができず心配です」とのことだった。母親と打ち合せをしている間もB君は車から降りようとせず、不安な表情で外を見ていた。

母親からB君に事情は一応説明したということを知り、車まで行って話しかけ誘ってみる。応じようとする気配はみせるものの、もう少しのところで車のシートにしがみついでしまう。

30分ほどのやりとりの後でB君の表情からある程度納得しているものの応じきれないでいると判断して、車から抱えだして玄関に座らせた。車に戻ろうとするのとしばらく張り合ったのち、母親に帰ってもらった。

B君はその後何度も当園に一時入所で来園しているが、母親は「前に別の施設で預かってもらった時は、嫌がって2度と行こうとしなかったのに、めぶき園には自分から喜んで来るんですよ」と言っている。最近では母親が迎えにきても帰りたくない様子を見せることもある。

B君の場合は最初は自分から車を降りることができずに、私が抱えだした。職員に私から話したことは少しぐらい大目に見て、穏やかに温かく接するようという心情的な言葉にすぎなかったが、新しい場面にとけこみにくいB君が数日のうちに当園で安心して暮らせるようになった。何回か来園するうちに、職員からの課題にB君が応じる場面が見られるようになった。

入所施設は本人の意志を無視しているのも、みんな施設を出たがっているという施設性悪説のような意見もあるが、もともと施設に入所することが、本人の希望でなかったにしても、丁寧に説明することと、本人の辛さや痛みに共感しながらあまり否定的な評価をせず、穏やかに温かく接することで、納得し、安心して暮らすことができるようになる。

3 ステップ2「人と交流して暮らす」 自閉症児・者の場合、他者からの働きかけや誘いを無視しているかのようにみえるが、

不安やネガティブな体験から自信を喪失して閉じこもっている場合が多い。交流を重ねて人間関係が深まることによって応じることができるようになる。

<事例3>昭和44年生 男性 自閉症 療育手帳A1 C君は援助者の声かけや誘いに応じることができず、顔を伏せて全身を小刻みにふるわ

せながらうなり声をあげ、頻りに他利用者や職員を引き倒して、掴みあげたり、噛みつきたりした。大柄で力も強く、入園当初は職員が痣だらけになることもめずらしくなく、自然に落ち着くのを待つより仕方がない状態だった。C君のこうした行動はこれまでのおどしや体罰などによる支配や、C君の暴力を怖れて腫物にさわるようにしか接してこなかったことに原因があると考えて、おどしや体罰などの暴力で接しない。強制はしないが、本

人の意志や気持ちに配慮しながら働きかけや誘い方を工夫して、暴れた場合にはC君にも周りの人にも怪我をさせないように寝かせて、なだめて落ち着かせるようにした。

C君は現在、職員の声かけや誘いに「 する？」などと言いながら応じている。また、「頭が痛い」とか「 行く」などと職員に訴えてくる。どんな理由があっても体罰や暴力はいけないというのが当園の考え方である。C君の場合は「しばらく待っていると応じてくれる場合もあるので、しつこく誘わない」「しばらく時間をおいて、誘ってみる」「別の人誘ってみる」「強制的な言葉はさける」などとケース会議で話し合っ働きかけや誘い方を工夫したり、作業のメニューは本人の希望を可能な限り聞き入れるようにした。

寝かせは動作法を参考にして、C君の感情に巻き込まれないように注意しながら、ただ取り押さえるのではなく、力を受けとめながら本人が情動や感情のコントロールを学習することを目標に援助した。

<事例4>昭和56年生 男性 自閉症 療育手帳A1 養護学校からD君が実習にきた。進物用の箱折や手押式のアルミ缶つぶしなどの作業をマイペースでこなしている。生活面や移動も時間はかかるが大きな問題はなさそうである。

養護学校の先生と母親が見学に来て、様子を見て驚いた。D君は日頃は指示がなければ全く動くことができず、作業をしていることが信じられないと言うのである。

D君は小さいときから教育・訓練と称して、「否定・指示・命令」の嵐のなかに身をおかざるをえなかったために、自発的に動こうにも、金縛りにあったように、一步も動けなくなってしまうのである。自閉症児・者は生活上のスキルは身につけている場合が多いので、生活の流れや、今、自分が何をすればいいのかということがわかりさえすれば案外スムーズに暮らすことができる。本人の理解やリズムを無視して、否定されたり、過剰に指示・命令されることによって自閉症児の未熟な自我が萎縮してしまっているのである。

自閉症児・者は周囲の状況に適応して暮らすことが苦手であるために、本人の気持ちや状態を無視した教育・訓練にさらされやすい。C君は暴力をふるうことで、D君は指示がなければ動かないことで自我を防衛してきた。

安易な体罰や一方通行で画一的な教育・訓練は自閉症児・者の精神世界を荒廃させるだけである。本人の気持ちやリズムを大切にしながら工夫して誘ったり、働きかけていくことで呪縛が解けて人に応じて暮らすことができるようになる。

4 ステップ3「生きがいをみつけて暮らす」 人には何かに打ち込むことに喜びや生きがいを感じる前向きな指向性がある。別な言い方で自己実現と言ってもいいと思う。発達障害児・者が作業や趣味に生きがいを見つける

ことで自信が生まれ、表情が明るくなり、行動も落ち着いてくる。

利用者の生きがいを見つけることは、援助者にとって大きな課題である。

<事例5>昭和48年生 男性 自閉症 療育手帳A2 園の近くに住んでいる主婦から

ボランティアで手芸をしてみたいとの申し出があった。

さっそく数名の利用者を選んで毎週1回指導してもらうことにした。

E君もそのうちの一人だったが、主婦が持参した手作りの織機に興味を示し、すぐに作業手順を覚えて、「はたおり」と言って指導日を楽しみに待つようになった。やがて主婦の薦めで本格的な織機を購入してE君の作業にした。現在もE君は「はたおり」に熱中している。

E君は糸を何度も巻きなおして擦れや、瘤を入れたり、糸の色を途中で頻繁に変えたりする作業自体を楽しんでいるようである。普通に織って欲しいと思っている職員もいるようだが、私はあれはあれでおもしろいと考えていた。E君の所属する陶芸課の旅行で手織りの工房へ見学に行ったところ、E君がいつも制作しているような織物が展示してあった。

母親によると最近では自宅よりも園の方が落ち着いて生き生きして見えるそうである。

<事例6> 昭和50年生 男性 自閉症 療育手帳B1 F君は職員とも必要最小限しか会話をせず、いつも両手で耳を塞いでいる。食事中も耳を塞ぎながら器用に食べるほどである。彼はリネン工場に職場実習に通っていて、仕事が正確で無駄話もしないので社長さんから頼りにされている。

日本詩道会の師範がボランティアで木曜日の夕食後に利用者に詩吟を指導している。

他利用者の声に過敏に反応するF君がなぜか詩吟には必ず参加している。やがて指名されてみんなの前で独吟を披露するようになった。詩道会の大会があり、出場の意志を確認したところ、「出ます」とはっきりした答えがあった。F君は大会で堂々と独吟を発表し、参加者の感動を呼んだ。

F君はリネン工場で作業中や詩吟の大会で発表しているときは耳塞ぎをしない。その彼が普段はなぜ耳塞ぎをするのかわからないが、特定の利用者の存在が気になるようで、気にしている利用者が食事をしている間は食堂にも入ってこないし、同じ車にも乗ろうとしない。初めのうちは職員も注意したりすることもあったが、現在はF君の個性として認めるようになった。

事例1のA君は職員の3倍のスピードで箱を折ることができる。新しい箱でも器用に折る。

時々職員と競争して「A君の勝ち」と言われて、ニコニコと笑っている。毎週1回若い芸術家が絵の指導をしているがA君は飽くことなく没頭している。

事例3のC君も次々と陶器の壺や鉢を作り出している。詩吟の大会にはF君以外の利用者も参加した。G君が地域のマラソン大会で入賞した。園の祭りや研修会で太鼓演奏をすめことを利用者に伝えたところ、練習での意気込みが違ってきた。私は自閉症の青年がこれほど人前に出たがっているとは思っていなかった。

作業で能力を発揮して認められたり、実習先の社長に頼りにされることはそれはそれとても素晴らしいことだが、一心不乱に絵を描いたり、堂々と詩吟の大会に出場することも自己実現という価値観から看れば同じように尊いことではないかと考えるのである。

発達障害者の施設でも高い生産性や商品価値の高い製品ができたり、何人就職して自立したかということを称賛する傾向が見られ、そのことを決して否定するつもりはないが、結局、重い発達障害を持った人がこうした価値観から評価されることは少ない。生産性が低くても、稚拙な作品であっても、施設からなかなか出ていけないとしても、何かに打ち込むことで、生きがいや自己実現につながっていけるとしたらとても尊いことではないだろうか。豊かな人生とは結局は本人が自分の人生に価値を見いだすことであり、一人ひとりの生きがいとなるものを見つけて提供していくことが援助者にとっての課題ではないかと考えるのである。

5 まとめ 私は入所施設という場で、事例1のA君、事例3のC君、事例4のD君の例にみられるように、実に数多くの一方通行で画一的な教育・訓練の犠牲になったと思われる障害児・者に出会ってきた。

これまでは援助者の立場から障害児・者を変容するという操作的なプログラムが主流を占める傾向があったが、障害児・者が入所施設という暮らしの場で安心して、人と交わりながら、主体的に生きていくという前提があってはじめて障害児・者自身にとっての人生の価値というものが生まれてくるのである。

障害児・者の内的世界の理解という視点から彼らが入所施設で人間らしく豊かに暮らしていくための基本的な課題をつきつめていって、ステップ1「安心して暮らす」、ステップ2「人と交流して暮らす」、ステップ3「生きがいをみつけて暮らす」という3つの課題に到達する結果となった。

本論で述べたことは職員の姿勢や態度というようなどちらかという心情的な面が多いが、障害児・者の療育を利用者と援助者の関係性やその相互作用という切り口で見えていくと、実はそこが非常に重要なポイントであり、利用者にとっての課題と考えられていたものは援助者にとっての課題だったということに気づくのである。

私たちの未熟さや、あるいは相変わらず私たちの心に巣くっている傲慢さから、実際は多くの試行錯誤や過ちを繰り返してきた。それでも利用者は確実に成長している。彼らは実に寛大である。であれば、逆説的に入所施設での療育や援助にとって、本論で提起した視点を援助者が持つことが重要だと考えるのである。